

平成28年12月14日

秩父市議会議長 松澤 一雄 様

まちづくり委員長 富田 俊和

まちづくり委員会行政視察報告書

1 期 日 平成28年10月4日(火)～6日(木)

2 視察先 滋賀県長浜市、福井県若狭町、福井県大野市

3 参加者	委員長	富田 俊和	副委員長	竹内 勝利
	委員	江田 治雄	委員	黒澤 秀之
	委員	大久保 進	委員	笠原 宏平
	委員	斎藤 捷栄		

4 視察目的

滋賀県長浜市 「黒壁を中心とした中心市街地の活性化」

○ 市の概要

長浜市は、滋賀県の東北部に位置し、北は福井県、東は岐阜県に接している。平成22年の合併により、面積681.02km²、人口約12万人の都市となったが、天正年間に羽柴秀吉が「今浜」を長浜に改名し、小谷城下などの商人たちを集めて楽市である城下町を作ったのが、現在の市街地の基礎となっている。市域は、京阪神や中京、北陸の経済圏の結節点としての位置にあり、京都市や名古屋市から60km圏域、大阪市から100km圏域にあるため、JR北陸本線・湖西線



や北陸自動車道を主な広域交通軸として、これらの経済圏域と結びついている。さらに、平成18年10月にJR北陸本線・湖西線が直流化されたことにより、「琵琶湖環状線」として京阪神圏はもとより、北陸圏域への交通利便性が今後ますます高まるものと期待されている。

○ 事業の概要

長浜のまちづくりは、昭和 58 年の長浜城再興を契機に開催された「長浜出世まつり」を原点として、翌年に策定された博物館都市構想に依拠しながら取り組まれてきた。

まちづくりの特徴としては、市民自らが出資などの形で資金を出し合い、事業組織を多数立ち上げていることが挙げられ、これらの多様な主体がそれぞれの分野で活動を展開し、それが重なり合いながら中心市街地の魅力を形成している。

まちづくりを牽引してきた株式会社「黒壁」は、明治 33 年に国立第百三十銀行長浜支店として建てられた歴史的建造物の保存及び中心市街地の活性化を目的として、民間企業 8 社及び市の出資による第 3 セクターとして誕生した。それまで地場産業にも存在しなかったガラス事業を核とし、工房やレストラン、観光物産館、美術館などを、空き店舗を活用して運営している。直営店舗は 30 店で、年商は 5 億円に達する。これまでの取組みにより、中心市街地にあった空き店舗は 65 件から 20 件に減少し、黒壁スクエアゾーンを中心とする中心市街地への入込客数は年間 200 万人ほどで安定して推移している。

福井県若狭町 「有害鳥獣の処理及び利活用」

○ 市の概要

若狭町は、福井県の南西部に位置し、面積は 178.65k m²、人口は約 16,000 人である。若狭湾 国定公園の中心部にあつて、「三方五湖」をはじめ水資源が豊富な町で、この地の歴史は 1 万年以上昔の縄文時代まで遡る。国道 303 号は、かつて日本海と畿内を結ぶ「若狭街道」として多くの人や物、文化が行き交い、街道に沿って栄えた宿場町「熊川宿」は国の重要伝統的建造物群に選定されている。また、水月湖の「年縞」は、出土品や化石などの年代測定の精度向上に寄与している。農業では、梅や梨などの果物栽培が盛んなほか、産業としての宿泊観光に力を入れている。

○ 事業の概要

(1) 経過

平成 19 年度 嶺南 6 市町の共通する課題である、有害鳥獣の処理および利活用について検討するために「嶺南連携事業推進協議会」を設置し、基本構想を策定

平成 21 年度 基本計画策定

平成 22 年度 用地の取得、用地造成工事、
焼却処理施設・専用道路の詳細
設計

平成 23 年度 焼却処理施設完成 (24 年 3 月)

平成 24 年度 焼却施設運用開始 (24 年 4 月)、
食肉処理加工施設工事着手
(25 年 3 月)

平成 25 年度 食肉処理施設・専用道路完成



(2) 事業名

嶺南地域有害鳥獣処理・加工施設整備事業

(3) 敷地面積

3,061 m²

(4) 事業主体

若狭町（嶺南 6 市町を代表して実施）

(5) 総事業費

588,176,000 円（国庫：180,675,000 円、
核燃料税：407,501,000 円）



施設稼働日数は年間 350 日、処理頭数は年間 9 万頭である。なお、若狭町で捕獲した獣類は、平成 27 年度で 2,036 頭に上るが、止め刺し、血抜きしてから 1 時間以内に食肉加工施設へ搬入しなければ商品にならず、散弾銃等の鉛の銃弾を用いて捕獲した場合も食肉用にはできないため、施設に搬入された個体の 10%程度が食肉製品として流通している。

福井県大野市 「城下町の再生を目指した中心市街地の活性化」

○ 市の概要

大野市は、福井県の東部に位置し、北は石川県、東と南は岐阜県、西は福井市等に接しており、総面積は 872.43 km²で福井県内最大、人口約 3 万 5,000 人の都市である。また、市域の約 87%を森林が占める。基幹産業として農業と繊維産業が盛んであったが、近年では電子部品などの製造業が進出するとともに、豊かな自然と歴史資産を活かした観光産業が期待されている。交通は、国道 157 号が南北に、国道 158 号が東西に走り、東は東海北陸自動車道、西は北陸自動車道と連絡し、JR 越美北線が福井駅で北陸本線と接続している。戦国時代に織田信長の家臣、金森長近が開いた城下町は、京都に似た碁盤目状に整えられ、現市街地の起源となっている。

○ 計画の概要

(1) 名称

第 2 期大野市中心市街地活性化基本計画（平成 25 年 3 月 29 日認定）

(2) 計画期間

平成 25 年 4 月から 30 年 3 月までの 5 年間

(3) コンセプト

原点への回帰 ～人が集う、活気に満ちた
城下町の再生を目指して～

(4) 目標

① まちなか観光による交流人口の増加

基準値 136,093 人

目標値 144,000 人

最新値 207,435 人



② 商店街を中心としたまちなか生活の充実

基準値	4,907 人
目標値	6,000 人
最新値	7,345 人

③ 豊かな暮らしを支える公共交通の実現

基準値	28,685 人
目標値	30,500 人
最新値	25,381 人

(5) 位置

越前大野城の東麓に位置する東西六条、南北六条の城下町の区域は、越前大野城の築城以降、平成の今日まで、まちの中心として発展してきた市街地である。また、行政、文化、教育、交通、医療など多様な都市機能も集積していることから、本計画においても、この旧城下町地区を中心とした区域を中心市街地として位置付けることとした。

(6) 区域設定の考え方

- ① 長い歴史の中で、まちの中心として栄えてきた旧城下町を中心とすること。
- ② 商業が集積し、歴史的、景観的な資源が残り、まちなかの回遊性の向上が期待される美濃海道沿線を含めること。
- ③ 市の都市規模を考慮した身の丈に合った面積とすること。

以上、3つの考え方を基本として、旧城下町を中心に、亀山周辺、JR 越前大野駅前及び市役所周辺を加えた 98ha を設定した。

(7) 他計画との整合性

- ① 第5次市総合計画
- ② 都市マスタープラン
- ③ 越前おおの観光戦略プラン

(8) 計画に基づき実施された(る)事業

防災倉庫整備事業、亀山公園整備事業、バス停留所整備事業、街なみ環境整備事業、商店街空き地空き家活性化対策事業、新にぎわい商業ゾーン形成事業、まちなか観光客誘致拡大事業、まちなか交流観光体験事業、まちの魅力再発見事業 等



【行政視察報告 富田俊和】

私達まちづくり委員会は、今後の秩父市政進展に活かすことを目的に他市の行政視察を行ったため、以下のとおり報告する。

今回の視察は「中心市街地の活性化」をいかに進めるか、また、現実には厳しい状況にある「有害鳥獣の処理及び利活用」についてであった。中心市街地の活性化に関しては、長浜市及び大野市を訪問した。総じて言えるのは、両市とも城下町であり、碁盤の目のように区切られた街路や町屋がほぼそのままの状態で見られること、まちづくりへの取組みに関しては民間企業や市民が主体となり、まちづくり会社が設立されていることであった。行政が先導している事例もあるが、「自分たちが誇りを持っているこのまちを、自分たちの手で活性化したい」という気持ちが、行動や計画に現れていることを感じた。大野市の財政力は決して良好ではないが、エリアの中に新庁舎を建設し、防災対策のほか多目的に使用する広大な面積の広場を設けており、「これは、近い将来、北陸新幹線が福井市まで延伸されることを見込んでの計画である」との説明があった。また「背伸びせず身の丈に合った計画であるため、民間企業や市民が溶け込みやすい」とも語ってくれた。双方ともに中心市街地への入込客数は伸びており、成果が出ていることを感じた。次に、有害鳥獣の処理及び利活用についてであるが、訪問前に想定していた事業費とは大きな隔たりがあった。1日当たり700ℓの灯油を使い高熱で焼却処分するため、1億8,000万円で建設した炉も、5年目から修繕が必要であるとのこと。秩父市においては、十分慎重に、真剣に考える必要がある。

【黒壁を中心とした中心市街地の活性化 竹内勝利】

10月4日は滋賀県長浜市の行政視察に赴いた。今から400年以上前に豊臣秀吉が築いた長浜は、楽市楽座の朱印状が明治まで続き商人の町として栄えたが、昭和40年代頃より郊外型大型店の出店により中心市街地が衰退していった。街の中心部には、第百三十国立銀行長浜支店として親しまれた建物があり、黒漆喰の外壁から「黒壁銀行」の愛称があった。その建造物の保存と中心市街地活性化を目的として、民間企業8社と長浜市により第三セクター株式会社黒壁を平成元年に設立した。地場産業にも存在しなかったガラス事業を核とし、ガラス館とガラス工房、レストランの3店舗で営業開始し、古い建造物と新しいガラス文化が来街者を増加させる起爆剤となり、現在200万人近いお客様を黒壁スクエアと中心市街地で迎えている。「文化芸術性」と言う大資本に真似の出来ないものを内在する事業として展開していた。ガラス工芸を中心とし世界の文化を取り入れ、グローバル社会に相応し、海外からの観光客を積極的に受け入れる「国際性」豊かな空間作りに取り組んでいた。

長浜市は、秀吉が築き、進取の気性で市民が培ってきた町、昔より人々が脈々と受け継いできた伝統文化の息づく町であった。秩父市においても取り組んでいきたいと強く思った。



【有害鳥獣対策視察報告 江田 治雄】

福井県若狭町の野生動物の焼却施設を視察した。全国的に鳥獣被害が広がっており深刻な問題になっている。視察した若狭町は、特に鹿・猪が天文学的数値で増え、道路上に飛び出し、車両衝突事故等も頻繁に発生する状況であった。平成19年に6市町で広域対策協議会を設置し、本格的な協議が始まった。平成24年に焼却処理施設、専用の道路を整備、翌年食肉処理施設も敷地内に完備した。総事業費は5億8千万円で、財源内訳は国庫1億8千万円、核燃料税4億円を受けた。さらに捕獲報償費も見直し、鹿は捕獲止め刺し・運搬を含め1頭あたり16,000円を支給している。タイミングよく処理場に鹿を搬入して来た方に話が聴けた。去年は、鹿と猪合わせて250頭を獲ったとのこと。農業の傍ら罠で捕獲するそうだ。単純計算でも約400万円の報奨金を得ており、この制度が功を奏し26年度は約1万頭を捕獲処分した。この他に集落を張り巡らす防護柵(鉄製)も延べ260kmに及ぶ。この事業も継続しており、財源の確保も国からの支援を受けている。我々の地域でも秩父地域鳥獣対策協議会が立ち上がり対策が始まった。自己財源の厳しい折、県や国へ強く要望し、手遅れになる前に対応が必要である。議員活動の中で積極的に提言していきたいと思う。



【まちづくり委員会行政視察を終えて 黒澤 秀之】

中心市街地活性化、有害鳥獣被害対策の先進自治体として、滋賀県長浜市、福井県若狭町、福井県大野市の行政視察を行った。長浜市、大野市は城下町であり、中心市街地における道路整備状況は、所謂、碁盤の目状に形成されており、敢えて都市計画道路の再構築は必要としない。よって、主たる中心市街地活性化の方向性は、日本全国で深刻化する空き店舗対策とそれらの有効活用により如何に交流人口を増やすか。また、交流人口増加によって定住人口増加に繋げられるかにかかっている。長浜市では、敢えて長くしがらみの多い商店連盟を基軸とする中心市街地活性化から、他業種主導(新設された第3セクター)による中心市街地活性化にシフトして、街の空き店舗が生まれ変わろうとしている点が印象的であった。大野市については、若者による街全体のイベント開催が一つの起爆剤となり中心市街地活性化に寄与していた。両市に共通して言えることは、街を変える起爆剤は、まちづくりの基本とされる「よそ者、若者、バカ者」の力を大いに活用している点である。決してその過程で、逆風がなかったわけではないが、丁寧な説明や街の将来を真に考え、新たな考えや行動を容認する関係者の寛容さがあったのかもしれない。若狭町における有害鳥獣被害対策については、規模の大きさに目を見張るものがある。農産物の鳥獣被害額と対策費用(費用対効果)については、容認できるレベルではないが、増え続ける有害鳥獣における住民の安全性優先の考えと有害鳥獣捕獲における雇用創出がなされている点が、自治体のやる気を窺わせる。ただ、手を拱いているだけでは始まらない。先進自治体に大いに学ぶ行政視察となった。

【先進地の視察を終えて 大久保 進】

初日は、黒壁で有名な滋賀県長浜市の中心市街地の活性化を視察した。

長浜市は、秀吉公が初めて城持ちとなったまちである。また、秩父市と同様に「曳山祭り」でユネスコ世界無形文化遺産登録を予定している。衰退する市街地を活性化させようと、市政40周年に市民からの浄財4億3,000万円をもとに秀吉公の城を復元し様々なイベントを開催した。その後、市・商工会議所・商店街が中心となり、「種まき」事業具現化の仕掛けづくりを始めた。第3セクターによる(株)黒壁を設立し様々な事業を手掛けていき、参加意識の変革、雇用の創出、空き店舗の解消、まちなみ景観の再生、新たな文化の創出を中心市街地にもたらした。当市においても似たような状況にあり様々な意見が大事になってくる。

福井県若狭町の有害鳥獣対策の勉強に行き、秩父同様にシカ、イノシシ等の被害に苦しみ、どのような対策を施してきたのかを伺った。6市町で「嶺南連携事業促進協議会」を設置し、6市町の真ん中にある若狭町に有害鳥獣の焼却施設、食肉処理加工施設を建設した。この施設は国からの補助金、核燃料税(原子力関係)を充当した。秩父においても広域での検討になることから様々な検討、議論が必要になってくると思われる。

天空の城で有名な大野市を訪れ、400年以上続く城下町と中心市街地の活性化についてお話を伺った。大野市は碁盤の目のようなまちなみとなっている、旧小学校跡地に「越前おの結ステーション」を整備し色々なイベントが開催できるようにして人を集めることができた。秩父市でも、まちなかを徒歩でまわれる整備をもっと進めていく必要があると感じた。

【まちづくり委員会視察を終えて 笠原 宏平】

まちづくり委員会では3か所の視察を行った。

滋賀県長浜市は、長浜城を擁する城下町である。明治時代に建てられた銀行が黒漆喰の壁であったことから黒壁銀行の名称で親しまれ、その建物の保存及び中心市街地の活性化を目的に黒壁が設立され、昭和63年よりまちづくりを行っている。歴史的建造物や町屋を活用した個性あるイベントを行い、多くの来訪者を呼び込むことに成功した。また、進行中の第2期中心市街地活性化基本計画において、第1期の検証や課題の検討を行い、老朽化した施設の移転・新築、生活密着型のコミュニティ商業施設の整備、新たな商業空間の創設等に取り組んでおり、中心市街地への来客数が伸びている。今後は来訪者の満足度を高めるソフト面の充実により、滞在時間やリピート率を高めていく考えである。2か所目は、福井県若狭町の嶺南地域有害鳥獣処理施設・加工施設の視察であった。この地域はシカやサルが増えすぎ、農作物への被害や交通事故も多発したため、確保したシカ等の焼却処分施設及び食肉加工施設を建設した。総事業費は5億8,817万6,000円、焼却施設は1回あたりシカ20頭の焼却能力を有する。なお、加工施設では、食用として加工できる頭数が少なく需要も多い現状にはない、との説明があった。最後に、福井県大野市の中心市街地活性化に関して視察した。越前大野城は天空の城としても紹介され、城下町として道路が碁盤の目のように整備されており、幅員も広く好感の持てるまち並みであった。まちづくりは、市民と行政が一体となって進めれば良いものができるのだと、強く思った次第である。

【4プラス1からのスタート 齋藤捷栄】

中心市街地活性化の先進地視察として滋賀県長浜市を訪れた。長浜市は、豊臣秀吉が初めて城持ちとなった町で、京阪神・東海・北陸の交通要衝として発展した町である。また明治以降は浜縮緬・蚊帳などいわゆる養蚕を中心とし「糸偏産業」の発展による近代化を図ってきた町であること、曳山文化を継承していることの2点に亘って秩父市との共通点を持った町でもあるが、1980年代初頭には、中心市街地から人が消え始め衰退していった。そうした中1983年市民の浄財をもとに長浜城を復元したことを契機に「町全体を博物館の様に魅力あるコトやモノで覆い、個性ある美しいまちとして住んでいこう」という基本構想が策定され、新たなまちづくりが進められて来た。その新たな発展への発端は、1900年に建造された歴史的建造物（旧国立第百三十銀行）の保存問題であったという。当時解体の危機にあった歴史的建造物を買収し、現在の黒壁ガラス館として市街地発展のコア（核）としてきたのが、第3セクター（株）黒壁である。その後空き店舗への出店を図り、平成元年からの10年間で出店数は28店を数え、周辺5商店街の空き店舗数は65店から20店へと減少させている。（株）黒壁のスタッフの多くは商業者ではないという。世の中変えるのは、わか者・よそ者・ばか者であると俗にいうが、ここも例外ではないようだ。

4プラス1からのスタートとは、交通要衝の北国街道沿いの4つ角にある歴史建造物の買収に当たった交通量調査では、1時間の間に通りかかったのは僅か4人の人と1匹の犬であったという、それが今や年間200万人を数えている。感動的な4プラス1の話であった。